

《資料紹介》

一乗寺向畑町遺跡出土、縄文時代後期の土偶

高橋 潔

1. はじめに

一乗寺向畑町遺跡は、京都市左京区修学院にある縄文時代から平安時代に至る遺物散布地として、京都市文化市民局都市芸術推進室文化財保護課が京都市の遺跡地図として公開している『京都市遺跡地図提供システム』(<http://keikan-gis.city.kyoto.lg.jp/kyotogis/iseki/main>) に登録されており、遺跡は図1に斜線で示した範囲とされている。

1986(昭和61)年に建物の新築に伴い、図1に示した調査地点において、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を行った¹⁾。この調査では、墳丘が削平された古墳時代後期の円墳(向畑古墳)が1基検出され、横穴式石室および周溝の一部が確認された。また、平安時代前期の土器類を多く含む土坑なども検出された。縄文時代の遺構は検出されなかったが、それら後世の遺構の埋土に混入して、一定量の縄文土器や石器類とともに、土偶と考えられる土製品が出土した。

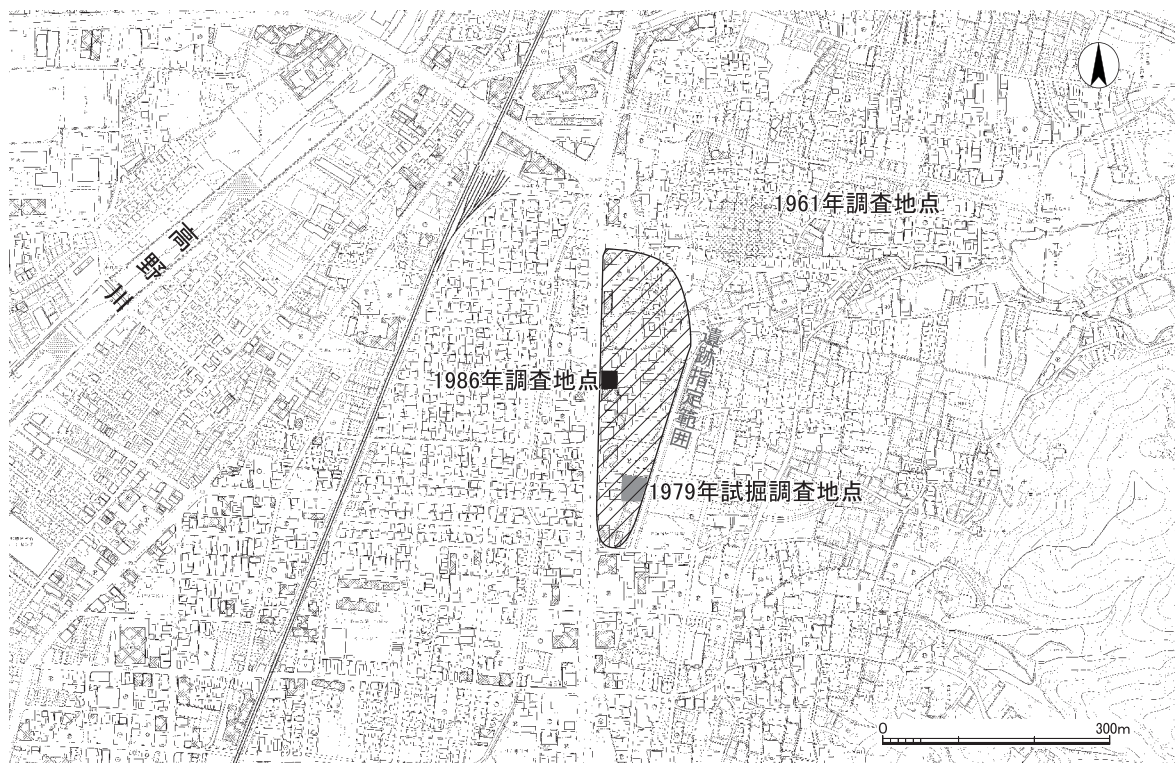


図1 一乗寺向畑町遺跡位置図(1:10,000)

2. 一乗寺向畑町遺跡

一乗寺向畑町遺跡は京都盆地北東部、高野川の東岸、音羽川・一乗寺川・白川などの河川によって形成された、比叡山の南西麓に沿って南北に広域に広がる複合扇状地上に立地している。同じ扇状地上の南方には京都大学が位置しており、北白川追分町遺跡をはじめとする縄文時代遺跡群が展開する。一乗寺向畑町遺跡はそれらからはやや北に離れて位置する。

一乗寺向畑町遺跡が認識されたのは、1961（昭和36）年当地域において実施された区画整理事業に伴う道路工事時に、工事掘削土中から縄文土器が見つかったことによる（図1網掛部分）。この時、京都府教育委員会により約1か月間にわたって緊急調査が実施された²⁾。遺構は検出されなかったが、遺物包含層から大量の土器類が出土した。1978～1979（昭和53～54）年には遺跡範囲を含む周辺地域一帯において実施された下水道工事に伴う立会調査で、標高80m前後で遺物包含層が確認され、縄文時代後期の土器類が多量に出土した³⁾。また、遺跡範囲内の南東部で1979年試掘調査が実施されたが、顕著な成果はなかった⁴⁾。

1961年の調査で出土した遺物は、現在京都大学考古学研究室で保管されており、2010～2012年にかけて整理作業が行われ、詳細な報告書が刊行されている⁵⁾。ただし、これら遺物が出土したとされている地点は図1に示した通り、京都市遺跡地図が示す遺跡範囲外の北東部住宅街に当たるとみられ、遺跡範囲については早急に見直しが必要だと考えられる。

3. 1986年調査出土資料

本稿では、1986年の発掘調査報告書に掲載されず、これまで一部文章⁶⁾にてその存在が知られていた縄文時代後期の土偶と思われる土製品破片について紹介する。なお、報告書に掲載された縄文土器についても、実測し直したものをあわせてここに掲載する。

先にも触れたが、1986年調査では古墳時代後期の古墳と平安時代前期の土坑などが調査されたものの、縄文時代の遺構は皆無で、すべて後世の遺構の埋土から出土したものである。出土したものは縄文土器・石器類と土偶と考えられる土製品破片である。土器類は混入品であるとはいえ、比較的時期差のない、まとまりのある一群であると考えている。

（1）土偶と考えられる土製品（図2、写真1）

『リーフレット京都』No.19「日野の土偶」⁷⁾では、伏見区日野谷寺町遺跡における1984（昭和59）年の調査において出土したいわゆる「分銅形土偶」が取り上げられた。その文中に、当時知られていた京都府下における土偶出土例の一つとして以下のように紹介されている。

「京都市左京区一乗寺向畑町遺跡からも出土している。土偶片は脚部の破片である。やや内股で太腿が太く、立体的な土偶である。縄文時代の遺構は発見されなかったが、新しい時代の土層より縄文時代後期の土器片と共に出土している。」

当時、土偶の脚部片と認識されていたものの、1986年度の報告書には記述も図・写真の掲載もされなかった。おそらく『リーフレット京都』の記述が、唯一の公表資料となっている。今回当資料



写真1 土製品展開写真

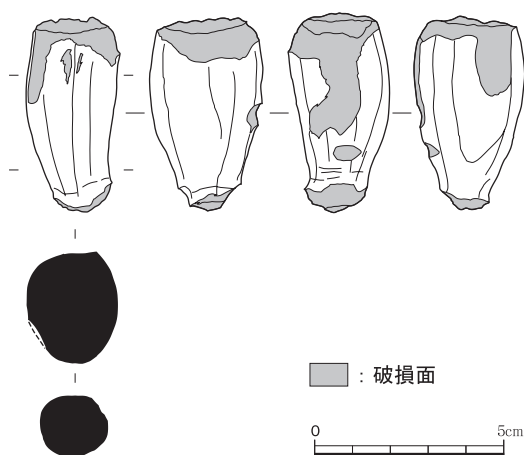


図2 土製品実測図（1：2）

を実際に検討し、元大阪府教育員会の大野薫氏、京都大学文学研究科准教授の千葉豊氏に実見していただく機会を得て、土偶の脚部の破片で間違いのないとの結論に至り、公表することとした。

この破片は土偶の右足の破片とみられ、上端・下端ともに破損している。縦5.1cm、最大径は2.4×2.9cmの楕円形、上端は胴部との接合部で、下端は足首に当たる部分で折れて、足先は欠損している。下端近くは断面がほぼ円形で、径は1.8cm前後である。足は上端が太く、下端の足首部分が強く狭まった形

態をしており、『リーフレット』京都の記述にあるように「やや内股で太腿が太」い印象の脚部である。胎土は緻密で金雲母を多く含み、在地系の土器の胎土とは異なって見える。

（2）縄文土器

縄文土器は、28点を掲載する。いずれも1986年度の報告書の図3に拓本・断面図、および図版7に写真が掲載されているものである。また、同時期と考えられている石器類（石鏃・石斧・石錘）も図4・5、図版13に掲載されている。

出土した縄文土器はいずれも破片であり、全形が判明するものではなく、便宜的に浅鉢（図3）、鉢（図4）、注口土器と底部（図5）にわけて図示した。

浅鉢（図3）では、胎土が比較的精製なもの（1～4・6・7）と粗製なもの（5・8～10）に大別できる。口縁部の形状は、水平のもの（1・2・6・8・10）と波状と思われるもの（3～5・7・9）とがあり、器形は屈曲するものと直口のものがある。調整は条痕のものが多く、ナデで仕上げるものもある。文様帯を持つものは少なく、1は外面口縁部と屈曲部に縄文、3は楕状工具による刺突列を並行して2条施し、その下部に縄文を施文している。4は波頂部に粘土を足して上面に円形凹みのある突起を作り出し、この突起の両側の面は薄く黒色に着色されている（図の灰

色塗布部分)。10は口縁部内面側の先端にへら状工具による刻み目を施す。

鉢（図4）はいずれも粗製のもので、調整は内外面とも条痕による。口縁部の形状は、水平のもの（13・14）と波状と思われるもの（11・12・15）とがあり、器形はいずれも直口のものである。文様を施すのは11のみで、口縁部内面の先端にへら状工具による刻み目、その直下に沈線が施される。

注口土器（図5－20～24）はいずれも胎土が精製であるが、全形のわかるものはない。体部外面には文様帯を持ち、縄文や擬縄文と沈線を組み合わせる。底部（図5－25～28）は浅鉢・鉢のものと考えられ、底部径の復元できるもののみを図化した。いずれも凹底である。

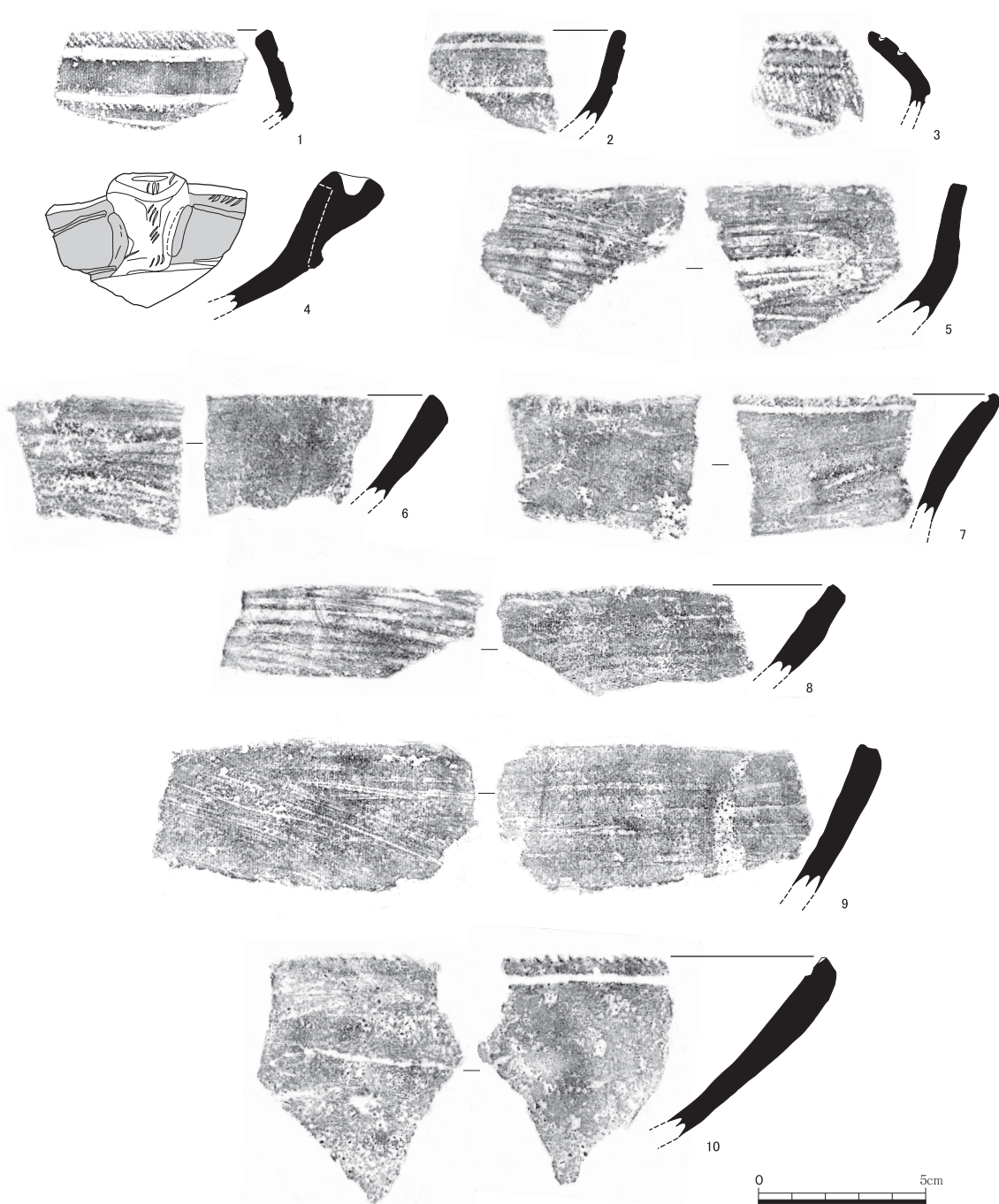


図3 出土土器実測図（1：2）

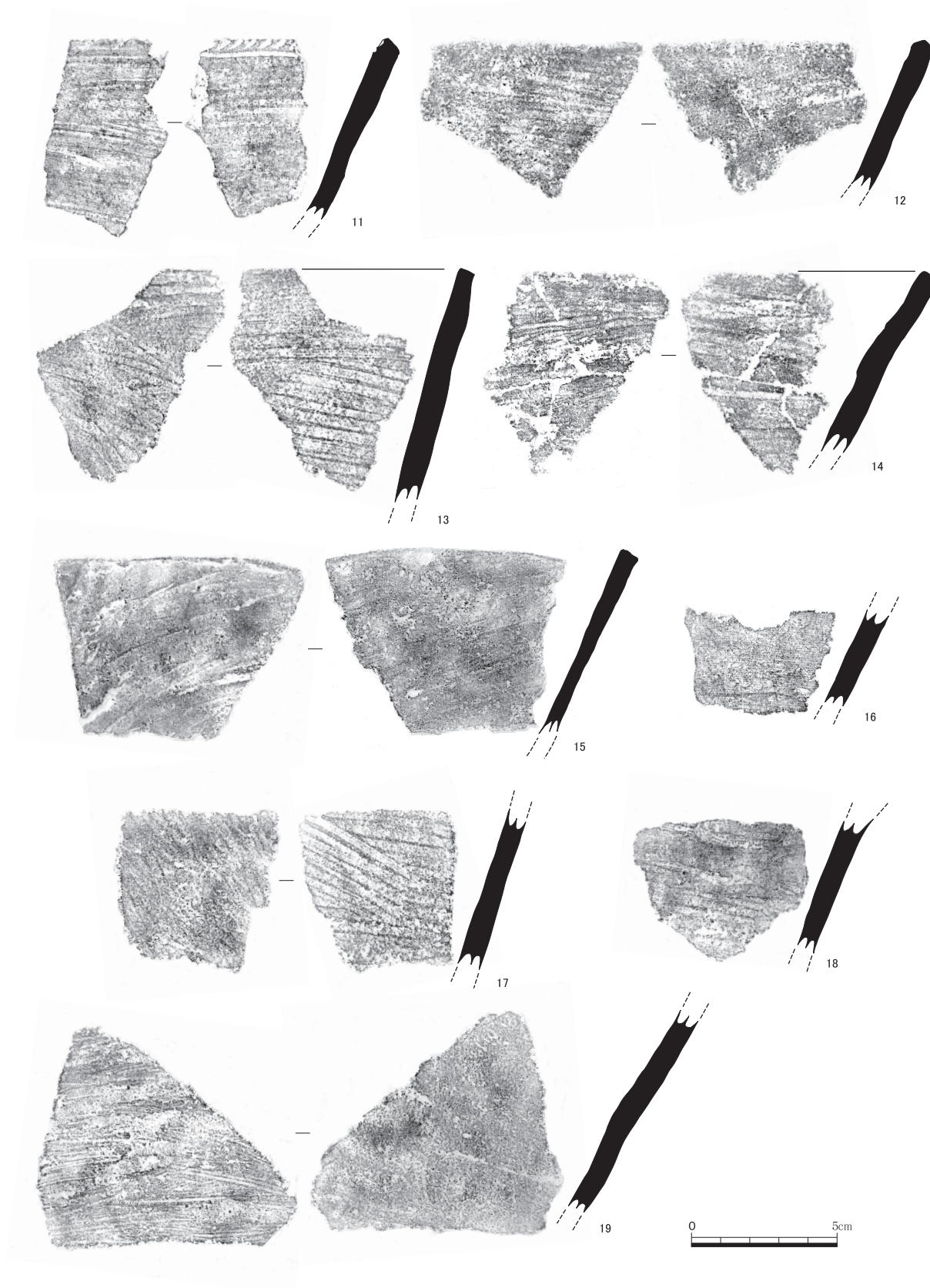


图4 出土土器实测图2 (1:2)

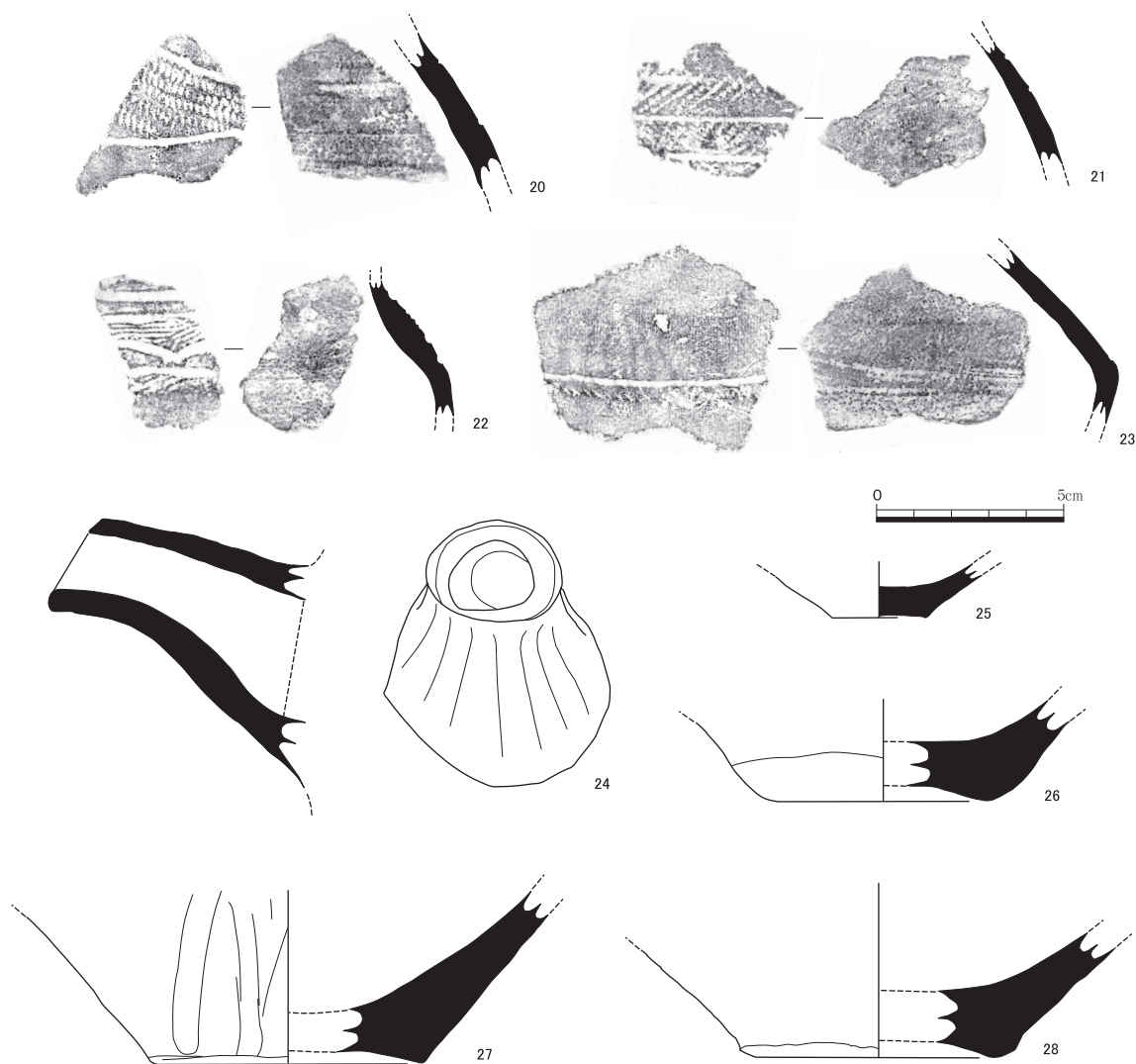


図5 出土土器実測図3 (1:2)

これら土器群の胎土は大半が在地系のものと判断されるが、10・15は角閃石を含まず、27は角閃石を含んでおり、いわゆる生駒西麓産土器の胎土に類似する。また、5・8・20には金雲母が胎土に含まれており、在地系の胎土とは異なっている。

4. おわりに

以上のように、土器群はいずれも破片ばかりで全形の知れるものはないが、器種や施文などの特徴から、縄文時代後期の中でも「元住吉山Ⅰ式期」⁸⁾の範疇で捉えられる一群とみられる。後世の遺構埋土などに混入した形での出土にもかかわらず、一定時期的なまとまりがみられる資料として評価したい。許されるのであれば、同様に出土した土偶と考えられる土製品についても、同時期の所産と評価したい。

この土偶の右足とみる破片については、先述のように内股で太腿が太い特徴的な形態のものである。実見していただいた大野・千葉両氏のご指摘により、東海地方で同時期にみられる「今朝平タイプ」土偶の特徴と一致することがわかった。

今朝平タイプの土偶は縄文時代後期中葉から後葉、東海地方（伊勢湾周辺）を中心に分布する顔

表現のない伸身像とされるもので⁹⁾、妊娠した豊満な女性像であるが、頭部が小さく目・鼻・口などの表現を省略しており、自立機能も退化するとされている。それまでの西日本では分銅形土偶はみられるものの、人形の土偶はみられなかった。東日本で発達した人形の土偶（山形土偶）およびその祭りが西に伝播する過程で、この今朝平タイプの土偶が成立し、近畿地方にも人形の土偶が受け入れられるに至ったとされる。現在最も西端の出土例と認められているのは、兵庫県淡路市佃遺跡出土例¹⁰⁾とされ、このタイプの土偶の分布・受容範囲の西限とされている。

本例は、右足の破片のみであるが、形態的にみて今朝平タイプの特徴を持っており、出土土器の年代観とも矛盾はなく、また分布・受容範囲からみても近畿地方においては主要分布域である東海地方により近いことなどから、「今朝平タイプ」の一例とみてよいと考えている。

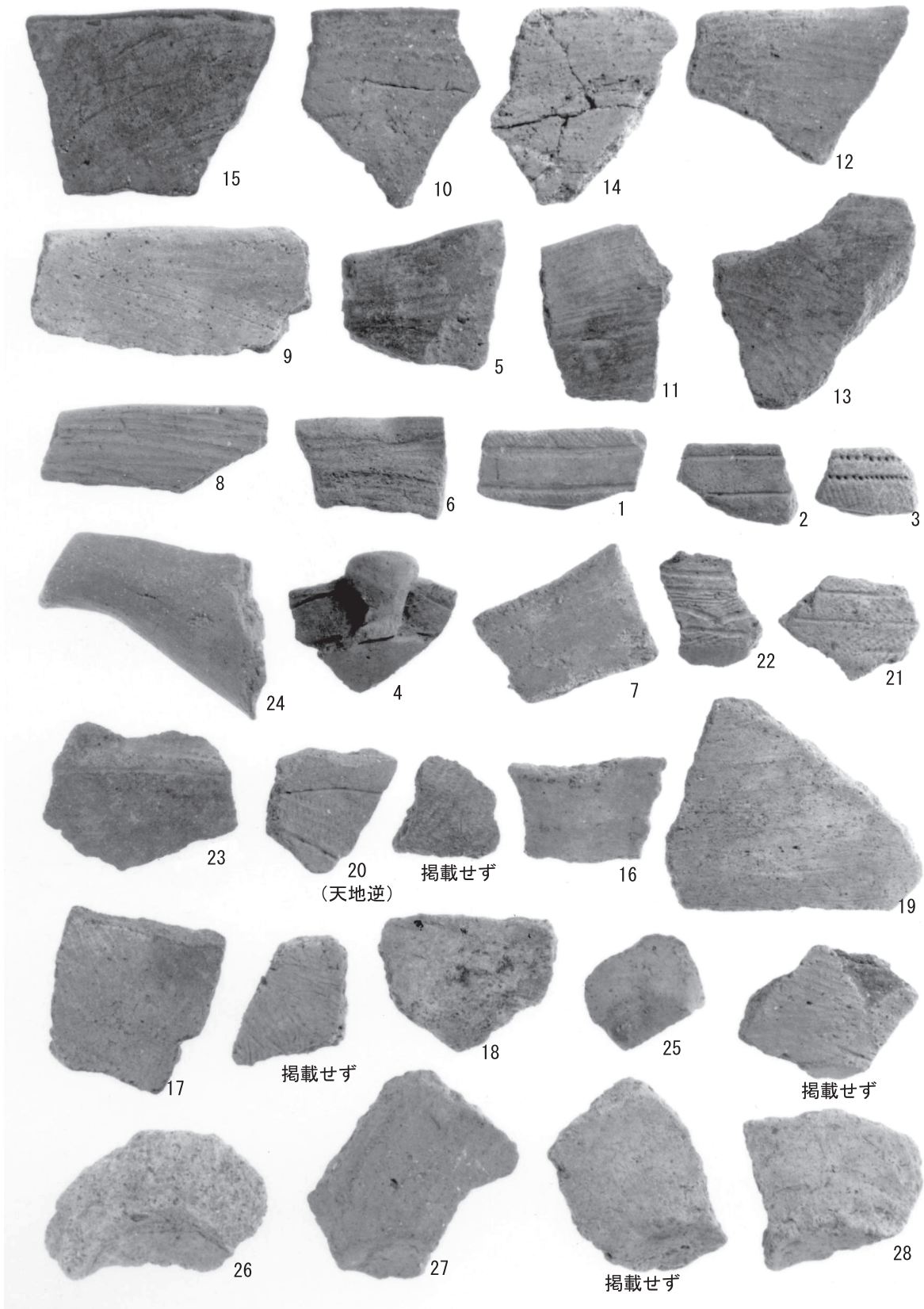
最後に本稿をなすにあたって、当該資料実見していただき、種々のご教示を頂きました大野薫氏、千葉豊氏に感謝の意を表して、擱筆することとする。(2021年6月28日了)

註

- 1) 『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1987年 平尾政幸・本弥八郎「一乗寺向畑町遺跡」『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和61年度』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 2) 佐原真「京都市一乗寺縄文文化遺跡の調査」『古代文化』7-2 古代学協会 1961年
- 3) 昭和52年度の試掘・立会調査概要『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年 これら出土遺物の一部は、『史料 京都の歴史 2 考古』(京都市 平凡社 1983年)に写真や実測図が掲載されている。
- 4) 一覧表に、「遺構はなし、遺物に土師器・須恵器」と記載 (No.254)。『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 国庫補助による試掘・立会調査報告 昭和54年度』京都市文化観光局文化財保護課 1980年
- 5) 『一乗寺向畑町遺跡出土 縄文時代資料 一資料編一』京都大学大学院文学研究科 考古学教室 2013年 『一乗寺向畑町遺跡出土 縄文時代資料 一考察編一』京都大学大学院文学研究科 考古学教室 2014年
- 6) 菅田薫「日野の土偶」『リーフレット京都』No.19 (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1990年 (発行者ホームページでPDFが公開されている。<https://www.kyoto-arc.or.jp/news/leaflet/019.pdf>)
- 7) 註6と同じ
- 8) 玉田芳英・岡田憲一「近畿」千葉豊編『西日本の縄文土器 後期』真陽社 2010年など
- 9) 原田昌幸「縄文世界の主な土偶型式とその分布」『土偶』(『日本の美術』第345号) 至文堂 1995年 伊藤正人「今朝平タイプ土偶覚書」『三河考古』第11号 三河考古刊行会 1998年 大野薫「顔のない土偶」『立命館大学考古学論集 III』立命館大学考古学論集刊行会 2003年 大野薫「列島西部における縄文後期土偶の重層的展開」『第10回土偶研究会奈良県大会資料』土偶研究会 2013年 伊藤正人「顔を消された土偶たち—今朝平タイプの出現と波及—」『東海縄文論文集 II』東海縄文研究会 2017年 大野薫「西日本の土偶研究」『特集 今日土偶研究』(『考古学ジャーナル』第745号) 2020年

10) 『佃遺跡』兵庫県文化財調査報告第176冊 兵庫県教育委員会 1998年

付図として、『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報』昭和61年度掲載の図版7を利用して、今回掲載した土器との対照関係を示す。各土器の右下の番号は、今回掲載の土器の番号と一致している。なお、図版7には32点が掲載されていたが、今回そのうちの4点は掲載しなかった。



付図 掲載土器対象図 (『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報』昭和61年度 図版7に加筆)